

知っておけばきつと役立つ仏事歳時記

戒名って何だ？

戒名とは

戒名はなぜ必要なのか

戒名は各宗派によって違うのか

戒名はどのようにして決まるのか

戒名は自分でつけてもいいのか

戒名によってお布施の金額は違うのか

その他（質問に答えて）

戒律（道徳的な徳を実現する為の規範）

五戒

殺生（せつしよう）

偷盗（ちゆうとう）

邪淫（じゃいん）

妄語（もうご）

飲酒（おんじゆ）

寺請制度（てらうけせいど） 檀家制度（だんかせいど） 寺檀制度（じだんせいど）

寛永十二年（一六三五）武家諸法度を改定し、近くの寺院に帰属させる寺請制度が始まる。

寛文四年（一六六四）江戸幕府がキリスト教や不受布施派を禁制として、信徒に対し改宗を強制することを目的として制定された制度で、幕府は佛教勢力を用いて寺請制度を完成させた。

寛文十一年（一六七二）宗門人別改帳が法整備されてからで、武士・町民・農民など階級を問わず民衆はいずれかの寺院を菩提寺と定め、その檀家となる事を義務付けられた。

元禄十三年（一七〇〇）ころには、位牌、佛壇、戒名といった制度が導入され、家々に佛壇が置かれ、葬式や法要には必ず僧侶を招く慣習が定まり、寺院は一定の信徒と収入が保証される形となった。民衆の情報は全て寺院に把握され、幕府の統治体制の一翼を担うこととなる。僧侶を通して民衆管理が法制化され、寺院は事実上幕府の出先機関の役所と化す。本来の宗教活動がおろそかとなり、やがて寺院は汚職の温床となつて僧侶の世俗化などの問題を招く。

明治になると尊皇思想の高まりや、神道国教化運動などによって神道優位の風潮が起こり、折からの佛教への批判は大きなものとなり廃佛毀釈運動へと繋がっていく。

宗門人別改帳（しゅうもんにんべつあらためちよう） 宗旨人別帳（しゅうしにんべつちよう）

寛文十一年（一六七二）幕府は諸藩に宗門人別改帳の作成を義務付けることにより、法的に整備され制度が完成した。寺院では現在の戸籍に当たる宗門人別改帳が作成され、旅行や住居の移動の際にはその証文が必要とされた。（寺請証文は、寺院が檀家に対して自己の檀家であることを証明するために発行した文書で、寺請状又は宗旨手形ともいう）

宗門人別改帳は民衆調査のための台帳で、本来の目的は、戸籍原簿や租税台帳の作成であり、毎年一回の調査・申告によって宗門改が作成された。人々が奉公や結婚その他の理由で他の土地に移動する場合には、年齢・性別・所属・宗旨などを記載して移転先の菩提寺に移転手続に当たる寺請証文（宗旨送・寺送状・送一札）を発行し、本人確認後の証明として移動先から移動元へ引取一札を送付した。こうした手続きをせずに移動（逃散・逃亡）をすると、改帳の記載から漏れて帳外れの無宿扱いになり、居住の制約などを受けるなどの不利益を被ることになる。そして、これらの人間を無宿人と呼んだ。

宗門改の制度は、明治六年（一八七三）キリスト教の禁制が解除されるまで続いた。

戒名に付ける居士の由来

僧侶の使命は読経・修行・布教です。薬師寺は年間を通して毎朝五時から金堂のお薬師様をはじめ全ての佛様の前で読経を勤めています。凍てつく冬の寒さも然る事乍らさることながら、夏の暑さは殊の外厳しさがありますが、国家安穩、天下泰平、風雨順時、五穀豊穰、病氣平癒、健康増進、身心安樂等生きとし生けるもの全て幸せを頂き、安心して命を育む事が出来るよう祈りを捧げています。特に現在は新型コロナウイルス感染症と気象変動による自然災害に対する不安、更に世界平和等の祈りを捧げさせて頂いております。

先日ある企業の営業マンからこんな愚痴を零されました。退職した取締役が突然来られて会社の運営、収益の状況、社員の家庭問題、個々の営業活動、今まで永年に亘り自分が経営の中心となっていたのだから、今更方針を変える必要がない等、理解し難い事柄をまくしたて、脅迫するが如くの前時代的な自論の押し付けがあったそうです。企業に於ける社員の序列は年齢や実績に関係なく役席の上席が先輩であり、いくら退職したとしてもその意見は無視する事が出来ません。これが世間の言う老害でしょうか、と。

日常業務は全てが完璧に出来るものではなく、時代の変化に伴い対応しなければなりません。特に現在はウイルス感染症が蔓延する中であり、担当者が暗中模索して意見を出し合いながら、より良い方向に進める努力をしています。口を挟んで自らの主張をこり押ししないと気が済まないそのような人を、世間ではそのような人を「一言居士」と揶揄します。

「一言居士」は本来「一言決る(こじる)」という表現で、「ひとこと決めてひねくれた言い方をしたり、知ったかぶりをして、自分以外を見下し独自の正統性を押し付けるひとを指して言います。例えば自称町の評論家となり人を批判した為、周囲に疎んじられたりすることもあります。

本来「居士」とはサンスクリット語のグリハ・パティ (grha-pati) で迦羅越(からおつ)と音訳され、家主、長者、富豪を意味しました。出家して僧侶とはなっていないなくとも、お釈迦様に帰依して佛教の奥義に達し、全ての人を分け隔てなく導く菩薩行の実践者を言います。

『維摩経』では、維摩居士が主人公です。お釈迦様は維摩居士が病になっていることを察知して、大勢の弟子や菩薩に「誰かお見舞いに行つてほしい」と頼みます。しかし弟子たちは、維摩居士との問答でやり込められた経験があり誰も行きたがりません。そこで結局文殊菩薩がお見舞いに伺うことになりました。

文殊菩薩は維摩居士に会うと「あなたはなぜ病になったのですか。どうすれば治るのですか」と尋ねます。すると維摩居士は「全ての衆生は思い込みと執着心によって病む。だから私も病むのです」「菩薩は大慈大悲の心によって憐れみです」「だから衆生の病が滅したとき、私の病は癒えるでしょう」と答えました。つまり私たちは物事に執着するから患い、苦しみが増長します。その苦しむ衆生を憐れむことで逆に病になると説いたのです。

『維摩経』が説いた教えに「不二法門」があります。「不二法門」とは、相反する二つのものは個々に存在しているのでは無く、一つであるという意味です。例えば「善と悪」「浄と穢」「敵と味方」「損と得」「悟りと迷い」「生と死」「肉体と精神」といった概念は二項の対立として捉えてはいけません。

文殊菩薩が「全ての事は言葉も説明も意識する事も、相互関係を離れて超越していません。これを不二法門に入ると言います」と答えると維摩居士は黙然として語りませんでした。文殊菩薩はこれを見て「なるほど文字も言葉もない事こそ不二法門を現わしているのだ」と讚嘆しました。これが「維摩の一黙雷の如し」の言葉で佛の教えは文字や言葉で説明する事も思い量る事もできないと身をもって示しました。

日本でよく知られる居士として、桃山時代の茶人である千利休がいます。利休は当初千宗易と名乗っていましたが、織田信長から豊臣秀吉に仕え、宮中献茶の奉仕に際して、正親町天皇より利休居士の称号を賜りました。

先に述べたように、本来居士とは在家で佛道に帰依する徳行ある人の称号です。日本では後世高德の士に用いる事もあり、利休居士もその一人です。その後江戸時代に入り徐々に一般庶民の戒名にも用いられるようになりました。男性が死亡した後の位号として戒名に付ける名称にもなりました。

本来の佛教用語である「居士」の語彙が時代の流れや地域の生活習慣に応じて徐々に変化した状態の一例です。